



検査で異常が見いだせない症状（不定愁訴）について

体の症状について、血液検査やレントゲン検査などを受けたけど「何ともありません」という結果だったことはありませんか？このようなケースは専門用語で「医学的に説明できない身体症状」と言われています。（俗に不定愁訴とも呼ばれます）

「医学的に説明できない症状」は珍しくないか？

いえ、珍しくないか非常に多く

みられます。ある研究によると病院や診療所を受診する方の4人に1人が「医学的に説明できない症状」と報告されています。ですから、症状があっても「検査で何ともない」のは、ご自身だけでなく他の多くの方で同じことが起きていると思ってください。

「医学的に説明できない症状」は原因不明の病なのか？

原因不明というわけではありません。検査で「何も分からなかった」のではなく、「悪性の病気ではない」とことが判明したのです。症状の原因が分からないと心配される方もおられますが、「検査で何ともない」は良い結果だと安心することが必要です。

それでは「医学的に説明できない症状」はなぜ起きているのか？現代の医学ではまだ十分に説明されていませんが、主に「体の動きの不調」だと考えられています。例えば検査で大きな異常のない「胃もたれ」の場合、昔は「胃炎」などと呼ばれていました。しかし今では医学の進歩によって腸や脳の動きが解明され、かつて胃炎と呼ばれたものは動きの不調であることが判明しています。病名も「機能性消化管障害」（機能性＝動きのこと）で、胃の動きを整える薬で治療されるようになりました。

「医学的に説明できない症状」で後に異常が見つかる割合は？

初めの検査で異常なしと判断され、後に重大な病気が見つかることはあるのでしょうか？研究結果によると初めの検査後1年以内に病気が見つかる割合は1〜2%〜0.4%程度と報告されています。十分な検査を受けて「問題なし」であれば、悪性の病気があることはまれということになります。

「医学的に説明できない症状」は難病なのか？

たいていの症状は快方に向かいます。検査で問題ないことがはつきりしていれば、対症療法で良くなることが多いと報告されています。

「医学的に説明できない症状」が長期間続いている場合は？

検査で異常がないのに長期間症状が続いている（6カ月以上が目安）場合、専門科での対応となります。当院では東洋医学科が窓口となっています。長い間症状が続いている場合、定まった治療法はなく短期間で治る特効薬はありません。しかし悲観することもありません。適切な治療により徐々に症状が軽くなる方もおられます。このように治療とは薬に頼るものではありません。

ん。症状に合わせて生活する、症状への考え方を変えるなど自己対処も必要です。そのような訓練と薬を組み合わせていくことでゆっくりではあります。症状が軽くなっていき最終的には症状が気にならなくなる方もおられます。

「医学的に説明できない症状」で受診したい場合は？

診療を進めていく上で、これまで受けた検査結果が参考になります。医師の紹介状があると大変助かります。

4月1日

総合病院地域包括支援センターの機能を強化します

4月1日より「総合病院地域包括支援センター」は、職員を常駐し、「街なか包括」として支援体制の充実を図ります。市民のみなさんのご利用をお待ちしております。

開設日 月～金曜日（国民の祝日除く）
開設時間 午前8時30分～午後5時15分

総合病院地域包括支援センター ☎32-3320
(内線5115・5116)